



公益社団法人 日本 WHO 協会

理事長 関 淳一

昨年も同様のことを感じましたが、今年の夏も日本の各地で猛暑日が続き、最高気温や猛暑日の連続記録等で、日本の気象台始まって以来の記録更新のニュースが度々報道され地球全体の気候変動との関連が頭を過ぎる日々でした。

前号で少し危惧の念を述べましたリオ・デ・ジャネイロでのオリンピック・パラリンピックも無事成功裏に終わり、4年後の東京大会への期待と共に様々な課題も見えて来た感があります。一方パラリンピックの成功と個々の選手の活躍の様子は、世界の人々に大きな勇気を与えるとともに今後の障害者施策の前進に寄与するところが大きかったと思います。

現在 WHO の感染症対策の中心的な存在である WHO 健康安全局流行感染症部調整官の進藤奈邦子氏に、東京での会合に出席の為に帰国された機会に、去る 6 月 20 日に私共の協会の主催による、主として学生を対象とした講演会並びに意見交換会に御出席頂く事ができました。進藤奈邦子先生には、WHO の感染症対策の第一線で現在仕事をされているご自身の経験について率直にお話し頂き、出席者の多くが国際保健の現場での仕事について新たな何かを得たと思います。その時の出席者の大阪大学医学部 5 回生の加藤美寿季さんに、当日の感想文をご寄稿頂きました。ぜひご一読ください。

今年の WHO 世界保健デーのテーマは「糖尿病に負けるな」です。このテーマのキャンペーンの一環として、私共の協会主催によるフォーラムを開催し、

北播磨総合医療センター病院長横野浩一先生に「糖尿病の常識・非常識」と題した御講演をいただきました。横野先生には、永年に亘る糖尿病学、老年医学の双方の臨床、研究の御経験から得られた幅広い視点からのお話を頂きました。特に、加齢が糖代謝に及ぼす影響、糖尿病と認知症、アルツハイマー病、サルコペニア、フレイル等との関係についてデータをもとに分り易くお話し頂きました。世界の先陣を切って、超高齢社会にある日本にとって将に時機を得た御講演でした。その時の御講演の記録を本号に掲載させていただきました。

又、去る 7 月 21 日には、京都大学の医療系学生の方達による、「未来の医師のためのグローバルヘルス・スタディーツアー」の訪問を受けました。このスタディーツアーは、世の中がネット社会化している今日、医療系の学生が国際保健医療に関係のある組織や機関等を実際に訪問して、インタビューや意見交換をする試みで、非常にユニークなものと思います。この度の大阪ツアーでは、当協会で日本国内に於ける WHO の活動の普及啓発状態などについての予備知識を得た後、大阪大学人間科学部中村安秀教授を訪問し、国際保健医療の現場の状況等について直接お話を聞くと言うものでした。そのスタディーツアーのメンバーの一人、池尻達紀さんの報告を本号に掲載いたしました。

今回、「目で見える WHO」第 61 号を発行するに当りご協力いただきました皆様に、この場を借り、心から厚くお礼を申し上げ御挨拶といたします。